慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	等伯画説 : 源豊宗考註
Sub Title	Talks by Tohaku about painting (in Japanese), rendered into Present-day Japanese with note by Toyomune Minamoto
Author	河合, 正朝(Kawai, Masatomo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.135- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

等伯画説

――源豊宗考註――

河合正朝

「等伯画説」は、京都本法寺第十世の日通上人が、桃山時代の画家長谷川等伯との間にかわした画事に関する談話の要点を筆録した「画之説」即ち一種の画論である。ために等伯研究の重要な根本資料として、又絵画という芸術についてまとまって語られた我国の最も古い資料として当時の文化人の芸術的教養、或は芸術観を窺い得て、日本美術史を学ぶ者にとって必見の書であることは、早くから指適されていた。

本書は、その旨を原本の写真版による復製に置き、これを校刊し、一々に註解を附すと共に、等伯伝をも含む綜説を加へ、公にしたものである。

長谷川等伯は、天文八年（一五三九）能登の七尾に生まれ、やがて上洛し、ついに当時第一の狩野派と対抗するだけの力をつけ、京都内外の寺院や武家の邸宅に多くの障屏画を製作した。中でも秀吉の子鶴松の菩提の為に建てられた祥雲寺の遺構である智積院の襖絵

や東京国立博物館の松林図屏風は、現在万人の認める所として高く評価されている。にもかかわらず等伯の前半生の画業やそれに連なる画風の展開には、今尚明らかでないところが多い。

「等伯の号は彼の人生の後半に入った後に見だされ、始は信春の名に於て活動している。今日知られる最初の作品は、彼の二十六才の時に画いた釈迦多宝仏など数点がある。これは信春の号を用いている。」(二九頁)と源氏は、等伯・信春同人説の立場をとる。この説は、土居次義氏が「日蓮上人像落款」「涅槃図落款及び同裏面銘」その他の本法寺資料より導き出したところから始まり(「等伯と信春の関係について」画説十七号に発表以来東洋美術文庫「等伯」他その後の土居氏の諸論文は終始この立場を貫いている)その後、これらの落款、印章を基として土居氏により集められた多くの資料と研究は(土居氏は、最近同人説に関する論文を集め「等伯と信春同人説」なる論文集を著している。)「信春を後の等伯と見る事については異説も出たがこれは史料的にも作風的にも、同人説を否定するのは妥当ではない」(二九頁)と、源氏をして積極的に肯定せしめた様に、今や同人説は定説化しつつある。しかしながら、他方、信春及び法眼落款時代を認めないとする山根有三氏の立場(「等伯研究序説」美術史一号)は、易きに走る我々に反省を促すものとして一概に捨て去ることは出来ない。というのは、同人説の史料的根拠である信春三十四才筆日蓮上人像と、我々が等伯作品として最初に接する五十一才筆旧三玄院襖絵との間には、全く空白ともいうべき、活動不明の十数年間があり、そこに多くの疑問の介在を許すのである。それ故、今後の等伯研究に成されべきことは不明の四十才代の活動の考究である。ここに於て「文禄元年前後」(三三頁)に成立されたと考へられる等伯画説の研究こそ是非とも必要であり、これを解明することこそ研究の第一歩である。等伯画説に示される系譜は、源氏の「信春の号は、恐らくその画風の師として仰いだ等春の一字をとったもので、彼の家は祖父法淳以来絵画に心を寄せ、父宗清は等春から画を学び、等伯は、むしろ父を通じて間接にその画風を継承したと見るべきだろう。」(二九頁)或は「等伯の等は多分雪舟等楊の等にその画風の系譜意識を示すものであろう」(三二頁)という論を導き出し、それは、等伯が晩年「自雪舟五代」を標榜する間の事状を想像出来るし、又すでに有名な等伯の牧溪私叔に関しても等伯画説は、具体性を与えるのである。従って現段階では、等伯の四十代は、室町の漢画、更にその源流である宋元画を虚心に学んでいた時期であったと想像出来るのである。この間「彼は堺に居住し、富裕な町衆を相手に画師として生活の資を得たであろうと共に、彼の芸術の新しい展開を求めて精進し、芸術の鑑識に関する知

識と感覚を身につけた」（二〇頁）とする源氏の説は、等伯解釈の新しい見方として興味をそそる。しかし、ここから「堺において得た収績を利休と知音を結んだ」とだけするよりは、等伯画説の内容から推して、名物所持の数奇の茶湯者であった津田宗及等との交友をも考へるべきではなかろうか。もちろん「日通上人も堺に於いて彼が親交を得た一人である」（三一頁）。やがてこれを背景として秀吉にも接近し祥雲寺の襖を描き、松林図を初めとする多くの水墨障屏画を残したが、晩年には必ずしも恵まれなかったらしい。かくて等伯は慶長十五年（一六一〇）二月二四日京都に歿した。

「等伯画説」は、最初に如拙以下の我国の漢画の系譜をあげ、大体その線に沿って話を進めつつ、その間にそれらの源流としての宋元画に触れ、更に外題についての知識や掛物の鑑賞に関する故実や心得、中国の花鳥画に見られる珍らしい鳥の説明を交えて、云わば書き定の形で元信と絵師窪田とについての記載を加えて終っている。これを源氏は「計画された編輯」とみている（三四頁）。その中で等伯は、我国画人では画系に関係のある雪舟、等春と共に能阿弥、相阿弥、単庵の系統や黙庵に興味を示し、中国画人については牧溪、玉澗、梁楷を初めとして当時名物として茶湯者の間に重んぜられた約二〇人の事が述べられている。ことに単庵智伝については、伝記を知る唯一の資料であり（二一頁）、又君台観左右帳記が元の人とした黙庵を「性徳ハ日本人也日本一ノ絵也」（一一頁）とし、又宗恵に日通所持の梁楷の「柳に鳥の絵」をしつかな絵と評（二〇頁）されたことから、「しづかな絵」「いれがわしき絵」という絵画鑑賞に於ける二つの美的範疇を考えている事は、永禄天正年間の茶湯者の通説と異なり牧溪を玉澗より高く評価している事と共に等伯の絵を鑑賞する時はなはだ興味深い。

次に源氏は、「等伯画説は、はたして等伯の物語を記したものであろうか。」と疑問を提出し、「本書を見ると等伯伝、もしくは等伯物語と書き込んで、その記事が等伯の語る所であることを特記したものが十二箇所ある。それは少なくともそれ以外の事項は、必ずしも等伯の語った事とは限らないのではないかという疑問をいだかせる」とするが、「日通の意見を記す時は、私に云うと断り書を加え、断り書のないものの中にも、堺の宗恵が来て彼の所持する柳に鳥の絵を、しずかな絵だと感嘆したという話の様に日通自身の経験を記したものもあるが、それは多方極めて僅である。」と考え更に「本書を通読すると、全体として流石に等伯の芸術に関連をもつ事項が多い。そして本書が当時の数奇社会の芸術観を反映しながら、絵画以外について何等触れることのないのも画人等伯の物語として見る

時はじめて諒解される所である。それ故本書は、大体に於て等伯の所説を編纂したものとみて差支えないだろうと」述べている。

即ち、等伯、日通をも含めた当時の最高の唐絵鑑賞者であった堺の茶湯者の一般的な教養の反映を見るべきであろう。

そして源氏は「室町時代以来芸術観は中国主義であり当時の数奇者が珍重したのも中国の宋元名家の作品が主であった。にも拘わらず、日本の鑑賞はただ盲目的に舶載の作品を受容したものではなく、例えば、中国鑑賞界が殆んど無視したに近い玉澗や牧渓を高く評価したことは、我国人の鑑賞が決して主体性を見失わなかった事を物語り」（三六頁）又「当時の我国人が中国画に傾倒しつつも、如拙、周文、或は黙庵に対して深い認識を特ち、彼等が正しく芸術を見る眼を所有していたことを、等伯画説の中に看取出来、日本の芸術の鑑賞史上の重要な資料である」と結んでいる。

以上、等伯画説は、曽って「美術研究」一号に公刊された事があるが、それには、解読未了の個所や解読の適切でない個所等がまま見出せるし、活字のみの校刊で、書写の原状を知り得べくもなくこの点に不満を持たざるを得なかった。かくて本書の公刊はこれらの欠を補うものであり、その註解は、源氏の多年の美術史研究より出た労作として、研究者に多くの貴重な示唆を与え術美史研究の促進に寄与するところ大なるものがある。

（文華堂書店　定価八〇〇円）